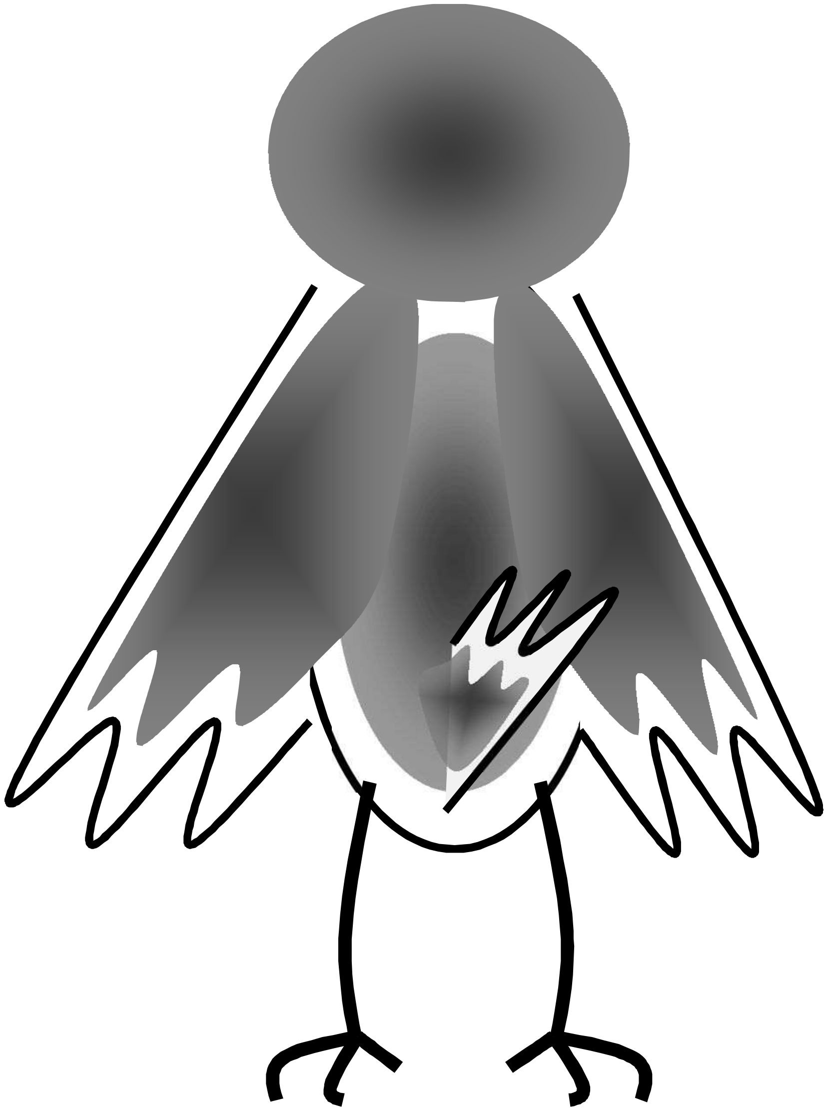
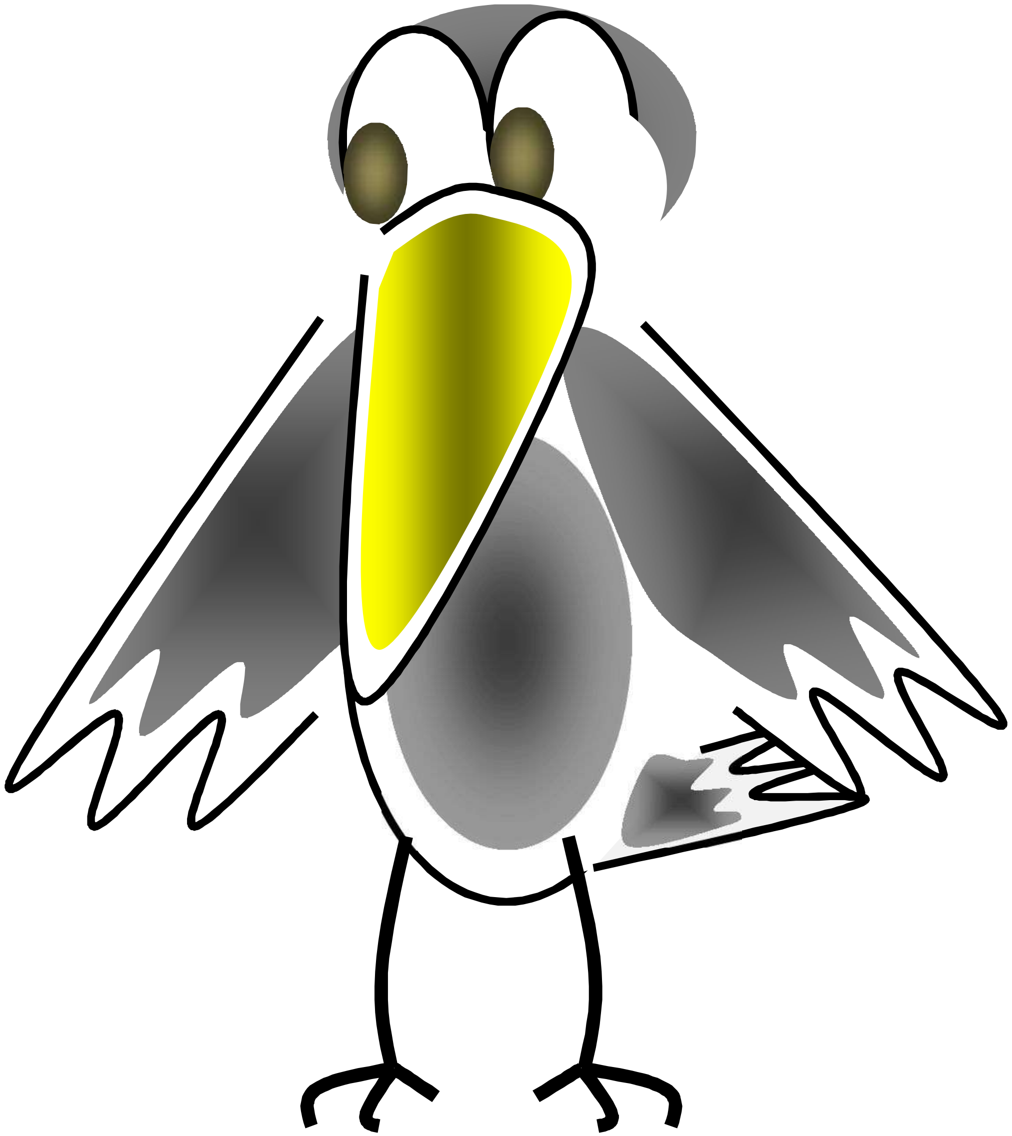


鳥の独り言（十八番）



作・絵　幸徳環境設計

烏の独り言（十八番）

第　一　羽	ビルの上から
第　二　羽	人間＝知的
第　三　羽	本当の幸せ
第　四　羽	満員電車
第　五　羽	メタボリックカラス
第　六　羽	熱帯夜
第　七　羽	外来生物
第　八　羽	人口減少・高齢化
第　九　羽	本当の子供って
第　十　羽	星空の下で
第十一羽	ストーカー
第十二羽	告白
第十三羽	夢
第十四羽	命あるもの
第十五羽	一歩
第十六羽	できることから
第十七羽	素直に
第十八羽	旅立ち

勝手なカラスの独り言です。人間様、どうぞ聞き流してください。

小生は、七人兄弟の末っ子として、この世に生を受け、名前を「カー」と言います。

お見知りおきを。

幼少、思春期、青春時代を山の中で過ごした小生ですが、早いもので人間様でいうところの三十路に差し掛かってしまいました。

カラス社会も人間社会と変わらず、田舎は過疎化が進み、若いカラスは皆、都会へと旅立って行く次第です。

小生は、田舎暮らしが一番と思っておりますが、都会を一度見ることも、人生の勉強と思い、今回、旅立つ決意をいたしました。

失礼しました。本当はそんな恰好のいいものではありません。きれいなお嫁さんを見つけることが目的です。

こんな小生ですが、人間様、優しく見守ってください。

（うだるような長い梅雨が明け、夏本番。ひと夏の恋を求めて、カーは、都会へと旅立ちました。）

第一羽　ビルの上から

（都会へ着いたカーは、林立するビルの中、最も高いと思われるビルの屋上に飛び降りました。）

カー、やっと着いたカー。ちょっと、休憩。

ふーん、これが都会ってやつカー。なんか、山の代わりにビルってやつが、そびえ立ってるって感じだな。

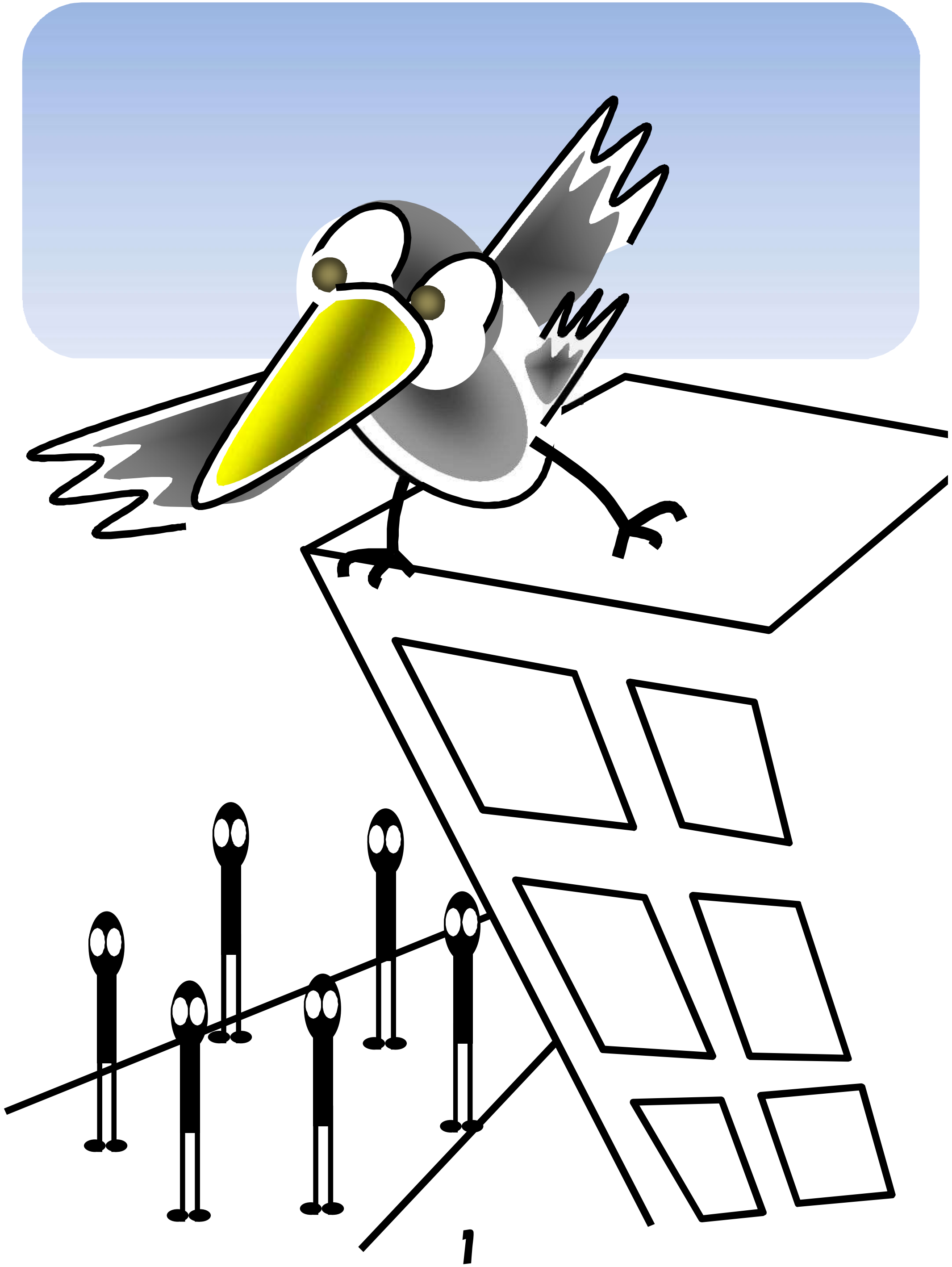
しかし、冷たい感じだな。

そういえば、下には人間がうじゃうじゃいるぞ。あっちにも、こっちにも。

カー、ありの大行進って感じだな。本当に。

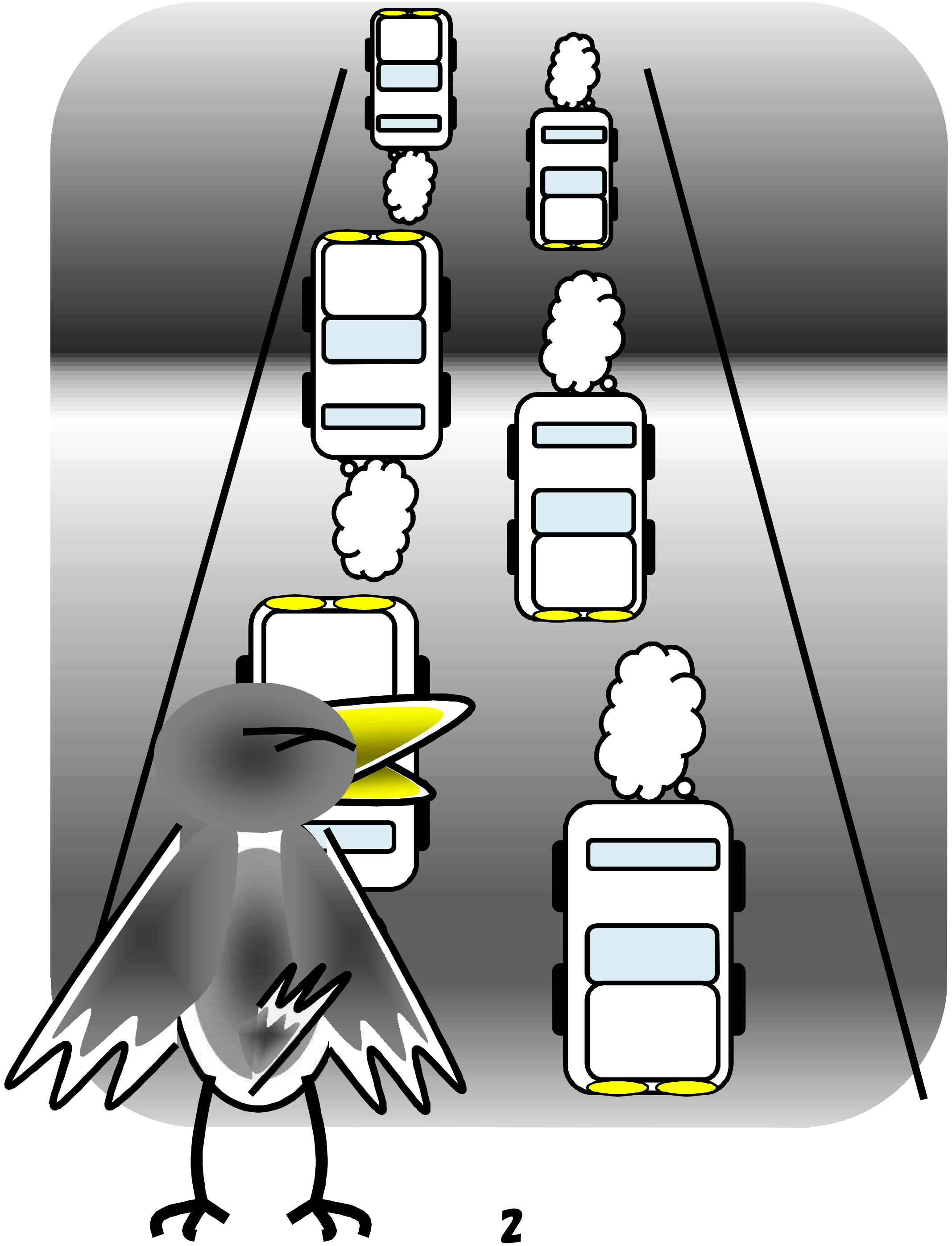
ビルへ入ったり出たりする様子は、アリが巣から出たり入ったりする様子と、少しも変わらない感じだな。

人間もこうして見ると、とても小さな存在なんだ。



第　二　羽　　人間＝知的

しかし、人間ってやつは不憫だね。だって、そうでしょ。
自分の足じゃ、そこいら辺しか行けないでしょ。おれ様には、こんなに立派な翼があるからよ、どこにだって、ひとっ飛びで行けるっていうのによ。
それに、この大空には道っていうものがないから、渋滞知らずってことだ。
「ん、カホ、カホ、カホ」
なんなんだ、なんだよ。ちきしょう、息苦しくなってきたぞ。どうなってんだ。
そいえば、空気の味が変だぞ。それに匂いも変だし。空気全体が、なんだか重たい感じがするぞ。
あ、あれが原因じゃないのか？車ってやつのケツから、煙がブンブン、ブンブン出ていらあ。
「カホ、カホ、カホ」
だめだこりゃ。本当に咳が止まらなくなってきたぞ。
ふざけんなよ、人間！
偉そうにしているわりには、こんな物しか作れないのカー！



第三羽　本当の幸せ

この暑さ、やっぱり川に来ると、ほっとするね。ちょっくら、水浴びでもしようかね。水も滴る、いいカラスってカー。
「バシャ、バシャ、バシャ」。気持ちいいな。こりゃたまらん。
ん、なんだありゃ、犬小屋か？
「コン、コン、コン」。どなたか、いらっしゃいますカー。
「誰だ。ん、ただのカラスじゃねぇか。何のようだ。邪魔だ。あっち行ってな」
せっかく尋ねてやったっていうのに、何て言い草だ。ところで、おじさん。ここで何をやってんの？
「ん、独りでのんびりしているんだよ。オンリー・エンジョイってやつだ」
独りで、こんな所で暮らして淋しくないのかい？もっと違うこと、するべきことはないのかい？
「何言ってんだ、カラス風情が！一生懸命働いて、会社のために働いて、何が残ったっていうんだ！この何もない暮らしが一番ってことだ。おまえには、分りはしないのさ」
そうかも知れない。けれど、何か違うような気がする。
だって、そんなの淋しいじゃないカー。そうだろ、そうだろ・・・

第　四　羽　満員電車

（カラスのカーは、昨日の夜こっそり電車に忍び込み、座席の下を寝床としました。目を閉じると、あっという間に深い眠りに落ち、気付いた時にはもう遅く、電車の中は通勤ラッシュの人間だらけ。逃げ出すことができません。）

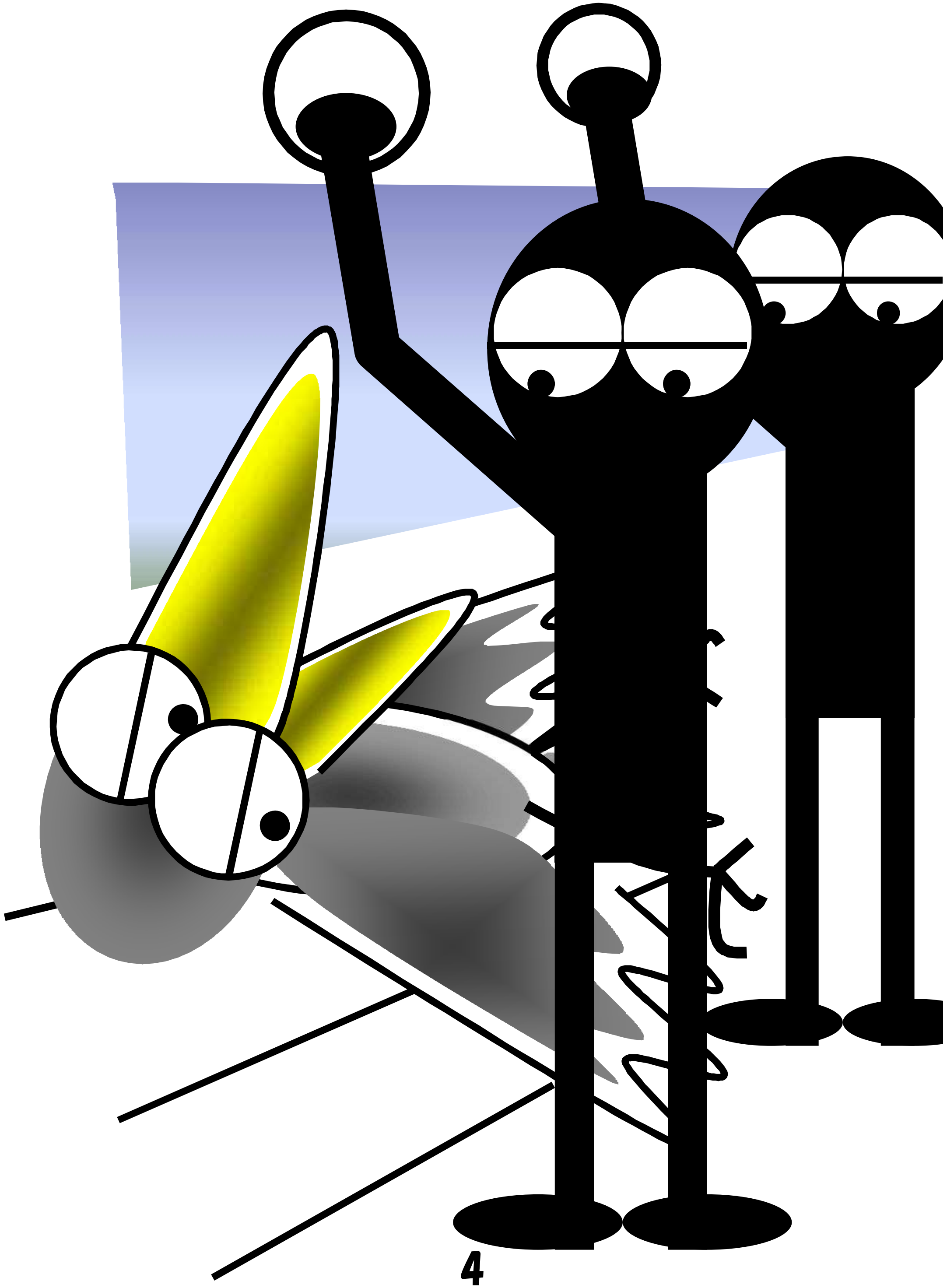
おいおい、なんだこりゃ。どうしちまったんだ。この人間の数は半端じゃないぞ。

これが通勤ラッシュの満員電車ってやつか。こりゃたまらん。

しかしどういうことだ、ここにいる人間たちは？どいつもこいつも、死んだような顔をしているぞ。この電車はまるで、地獄行きの電車ってわけカー。おかしいだろ、おまえら！

　朝っていやあ、一日の始まりだぞ。今日という日を精一杯生きる。希望に充ち溢れ、ワクワクして、それで、えぇと、えぇと・・・

なのに、わかしいよ。そうだろ！どうしちまったんだ。な、な・・・。



第　五　羽　メタボリック・カラス

おい、おまえ。何、ゴミ漁ってんだよ。

（すると、カーよりも体が一回りも、二回りも大きいと思われるカラスは、ゆっくり振り返り、カーの目をじっと見据えて言いました。）

「何って、見りゃ分かるだろ！食事に決まってんだろ。ディナーってやつだ。馬鹿か、おまえ」

ディナーって、おまえ。それ、ゴミだろ？そんなの食って、腹こわさないのか？

「本当に、おまえって馬鹿か？こんなにデリシャスなもの食って、腹こわすわけないだろ。そうか、もしかして、おまえ、おのぼりさんか？田舎もんのカラスが、知った風な口を聞くんじゃねえよ。おまえら田舎もんのカラスは、木の実とか、穀物とか、自然食しか食わないんだろ。本当にめでてえや」

あたりまえだろ！

「未だに、そんなカラスが生き残っているとはね。本当にめでてえや。化石もんだよ、おまえは。生きた化石、シーラカンスか？」

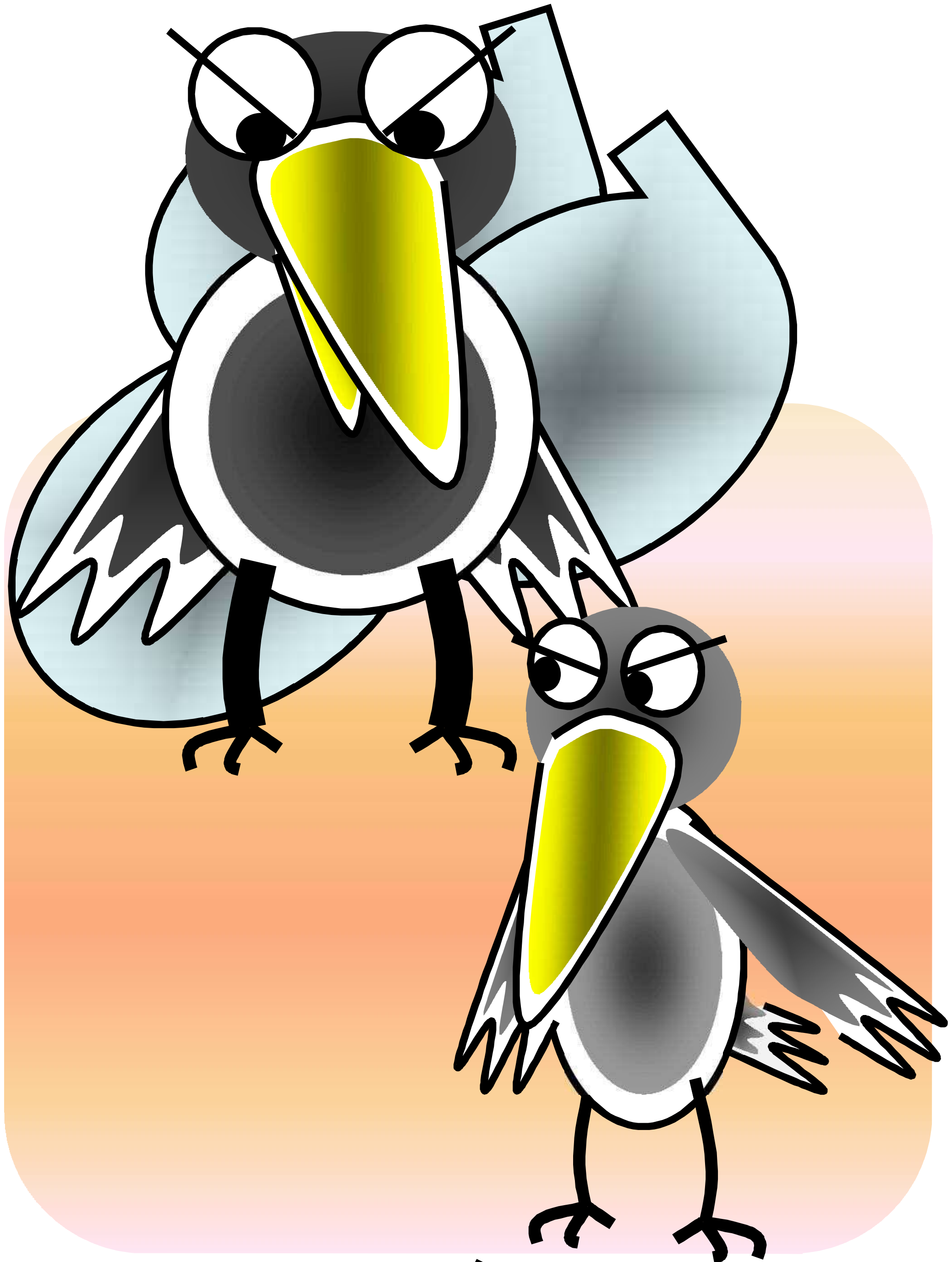
じゃあ、おまえはゴミ食って、おかしくないのか？ゴミのどこが美味いんだ。言ってみろよ。それに、プライドはないのか？カラスの誇りってやつがよ。

「人間ってやつはな、平気で食べ物を捨てるんだよ。それもな、まだ全然食べられるやつをよ！ただ、もう食べたくないから、それだけの理由でよ。それを拝借して、どこが悪いんだ。おれだけじゃない。ほかのカラス達も、カラス以外の動物達、犬や猫、ねずみやいたち、それに人間もだ。それに、食べらる物を捨てる人間の方が、おかしいいんじゃないのか？ここには、田んぼや畑、木の実がなる森なんかは無いんだよ。分かるか、田舎カラスが！それによ、プライドってなんだ！おまえには、プライドってもんがあるのか？」

（大きなカラスは、そう言うとゴミ箱から人間が残した食べ物を、次々とカーの前へ投げてよこしました。）

「ほら、食ってみろ！それがハンバーガーってやつだ。それに、こっちがポテトチップス、これがフライドチキンだ。なんだって、あるんだよ」

おれは、絶対食わない。おれはカラスだ！誇り高いカラスだ。おまえは、カラスじゃない。絶対、カラスじゃない・・・



第六羽　熱帯夜

なんなんだよ、この暑さは。夜だっていうのによ、全然涼しくならないじゃんカーよ。

眠れねえよ、くっカー。

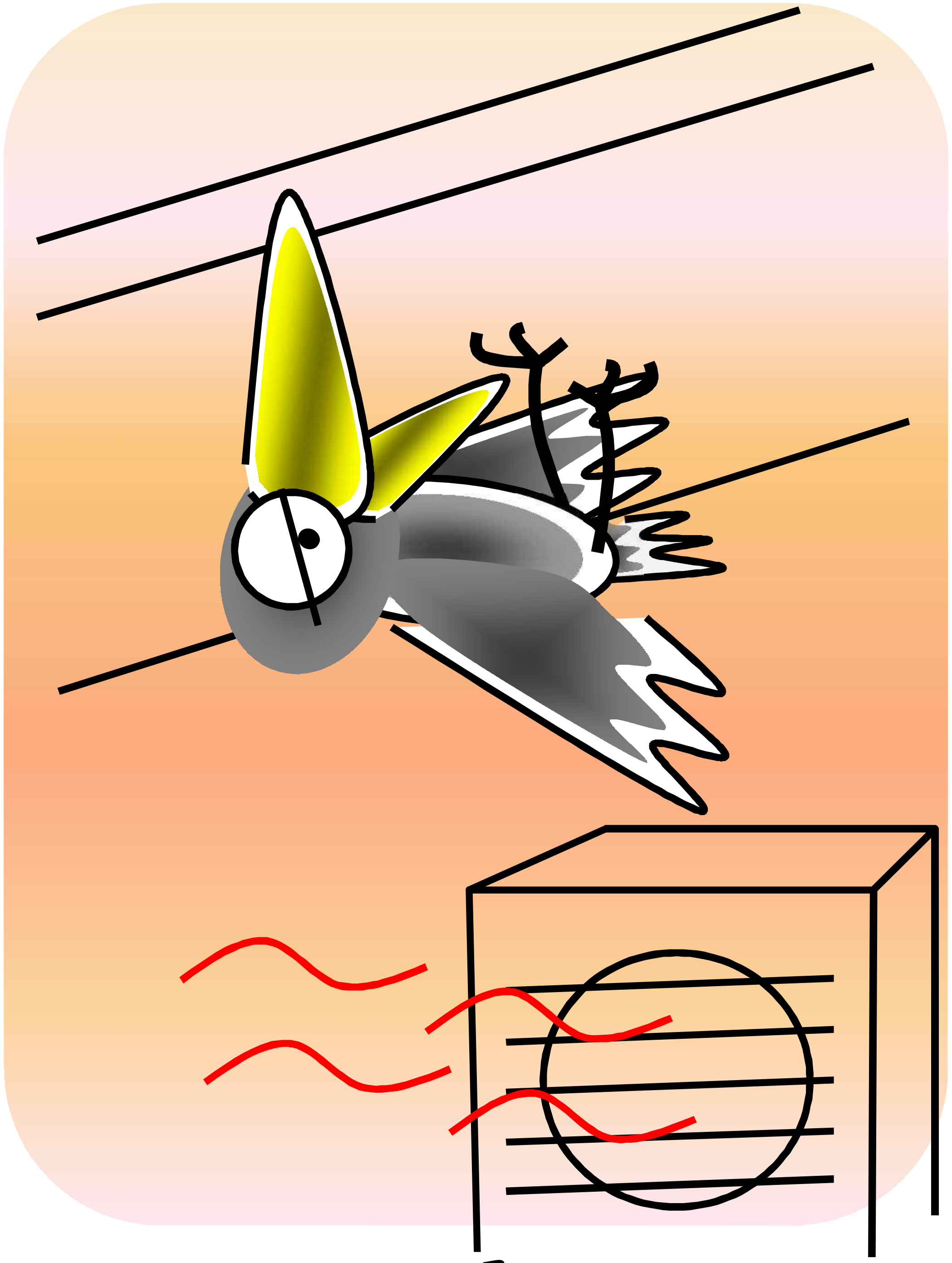
都会の夜ってやつは、どうなっちゃてんだよ。山じゃ、日が暮れると共に、少しづつ涼しくなるっていうのによ。なんなんだ。ん、なんだありゃ？

どの家からも、扇風機みたいなやつから、熱風が吹き出しているぞ。それに下からは、アスファルトってやつが、妙に熱をもっているぞ。こりゃ外は、電子レンジの中にいるみたいだな。

外なのに中？よく分らないぞ。「チン」、はい焼きカラスの出来上がりってやつカー。ふざけんな！

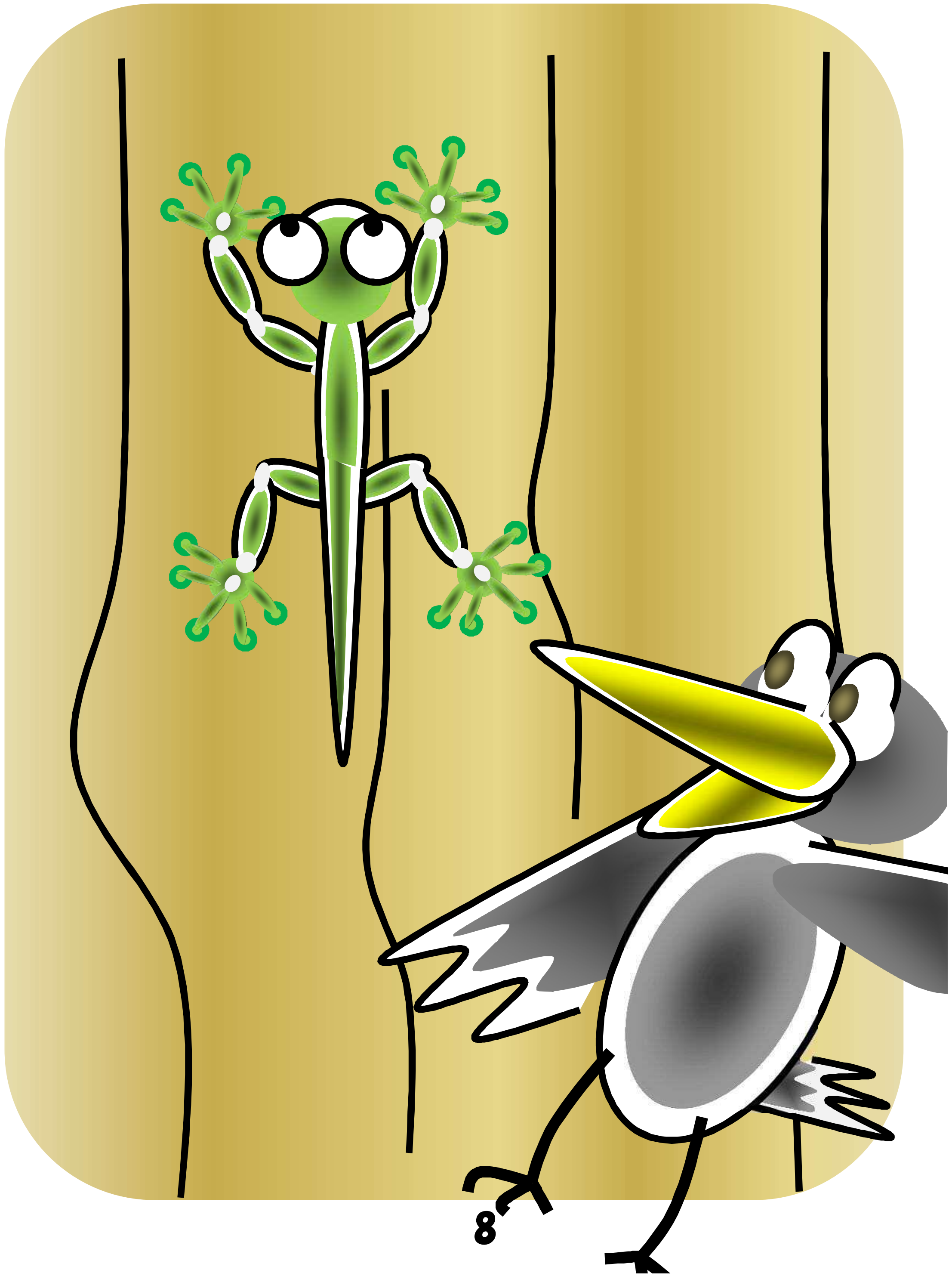
田舎では、少し暑い夜は、少し窓を開けるぐらいで涼しく快適に寝ているっていうのによ。都会ってとこは、どうかしちまってんじゃないのか？

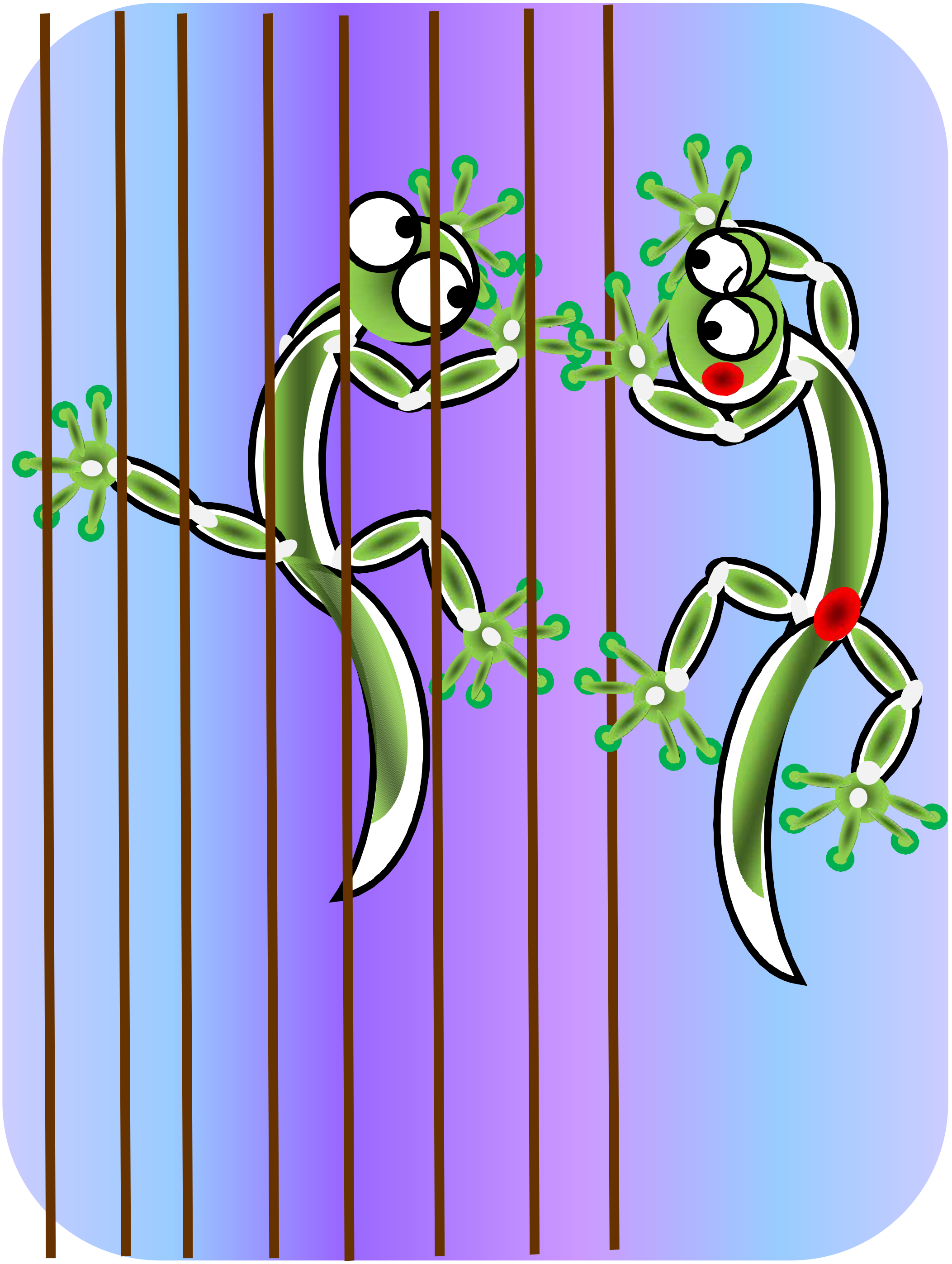
これじゃ、生きていけないよ。おまえらが、おかしくしているんじゃないのか？おまえら、本当に頭のいい生き物か？カラスほうが、よっぽど賢いぞ！



第七羽　外来生物

おいトカゲ、ここいらで見かけない顔をしているな。おまえ、日本生まれじゃないだろ！
「あたり前だ、おれは南米生まれってやつだよ。悪いか！」
なんで、そんなやつが、ここに居るんだ？
「知るかよ。おれは生まれた所で、幸せに暮らしていたんだよ。それがある日、恋人と一緒に、おいしい昆虫を探しに隣り森へ出掛けた時だよ。突然、人間たちが現れ、おれ達に網を覆い被せてきたわけだ。それで、網から籠に移される時に、おれはおもいっきり暴れて、恋人だけは逃がすことができた。けれど、おれは逃げることができず、ここまで運ばれたわけだ」
「それから、おれはペットショップって所に暫くいたな。そこまでは仲間がたくさんいたんで淋しくはなかったけど。一匹、一匹と減っていき、とうとうおれの番、普通の家に売られたってわけだ。それから、その家の人間も最初のうちは可愛がってくれたな。けれど、体が大きくなるにつれてけむたがられ、とうとうお払い箱ってやつだ。捨てられたんだよ。これで、お終い。分かったか」





そうか・・・・・、悪かったな。おまえって、強いな。
「言っとくけどよ、おれだけじゃないんだ、こうやって生きているやつはよ。今まで、いろいろなやつに出会ったよ。カメや魚、それに蛇、クモやカブト虫までいるんだぜ。全部、人間のせいだ。おれたちは、珍しいという理由だけで連れてこられ、飽きたら『ポイ』ってやつだ。おれ達には、生きる権利ってやつは認められないんだよ。人間って、いったい何なんだ」
何なんだろうな。
この広い地球に生きている生き物は、人間だけじゃないのにな・・・

第八羽　人口減少・高齢化

なんだか人間社会を見ていると、やけに大人ばかり目がつくんだよな。
例えば、公園なんか日中に行くと、普通は大人の数より、子供の数の方が圧倒的に多いはずなのに、どう見ても、大人の方が多いんだよな。どうなってんだろ？

よく見てみると、母親達が連れている子供はみんな、一人だけなんだよな。どうなっちゃってるんだ？

おれらカラスは、「七つの子」って言うぐらい子沢山なのによ。現におれだって、七人兄弟の末っ子だ。

夫婦二人で一人の子っていうことは、人間の数はどんどん、どんどん減っていくっていうことだ。そんなの、おれにだって分かる。人間は、もう子孫を残すっていう、生きるもの全ての大業を忘れちゃってんじゃないのか？
自分達が生きてきた証ってやつをよ。

まあ、それはいいとしても、結婚していない人間も多いんじゃないのか。
結婚しない方が楽とか思ってんじゃないのか。一人が気楽かもしれない。
けれど、二十年後、五十年後、死ぬ時のこと、考えてみろよ。その時に独り・・。

第　九　羽　本当の子供って

あれ、人間の子供たちが大勢、ビルの中に入っていくぞ。もう学校は終って夕飯までの間、外で遊んでいる時間のはずだぞ。

（カーは、子供たちが入っていったビルの前の電線にとまり、しばらくの間、窓越しにビルの中を覗くことにしました。すると、先ほどビルへ入っていった子供たちが、次々とビルの中の一室に入ってきて、整然と並べられた机と椅子に着席しはじめました。）

なんだ、なんなんだ、勉強しはじめたぞ。どうなちゃってるんだ。
あの子たちは遊ぶことが嫌いなのか？けれど、好きで勉強をしているように見えないけど。だって、あれが楽しそうな顔には見えないけど。
そうか、父さんがいつか言ってたっけ。人間社会は、子供の頃から勉強して、いい学校入って、いい会社に入って、他の人と競争して勝者になることが、それが幸せってことだと思っているみたいだと。
子供が子供らしく、それって大切なことじゃないのカー。

第　十　羽　　星空の下で

そういえば、都会に来てからというもの、ゆっくりと星空を眺めることも忘れちまったな。どうしたんだろうな、おれも。
おれも、すっかり都会のからすってカー。けれど、都会の夜空ときたら、きらめく星が全然見えないじゃないか。「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、ええと、ええと、・・・」それしか、それしか見えねのカー。
淋しいな、淋しいな。田舎の星空、見たくなっちゃったな。どうしちゃたんだろ。
でも、都会の人間にも見せてやりたいな。
あの星空を。一度だけでも・・・・。

第十一羽　ストーカー

あ、なんなんだ、なんだ、なんなんだ。このドキドキは？心臓がバクバクしてきた。どうしちゃったんだろ、おれは？

あ、いっちゃう。いっちゃう。どうしよう、どうしよう。

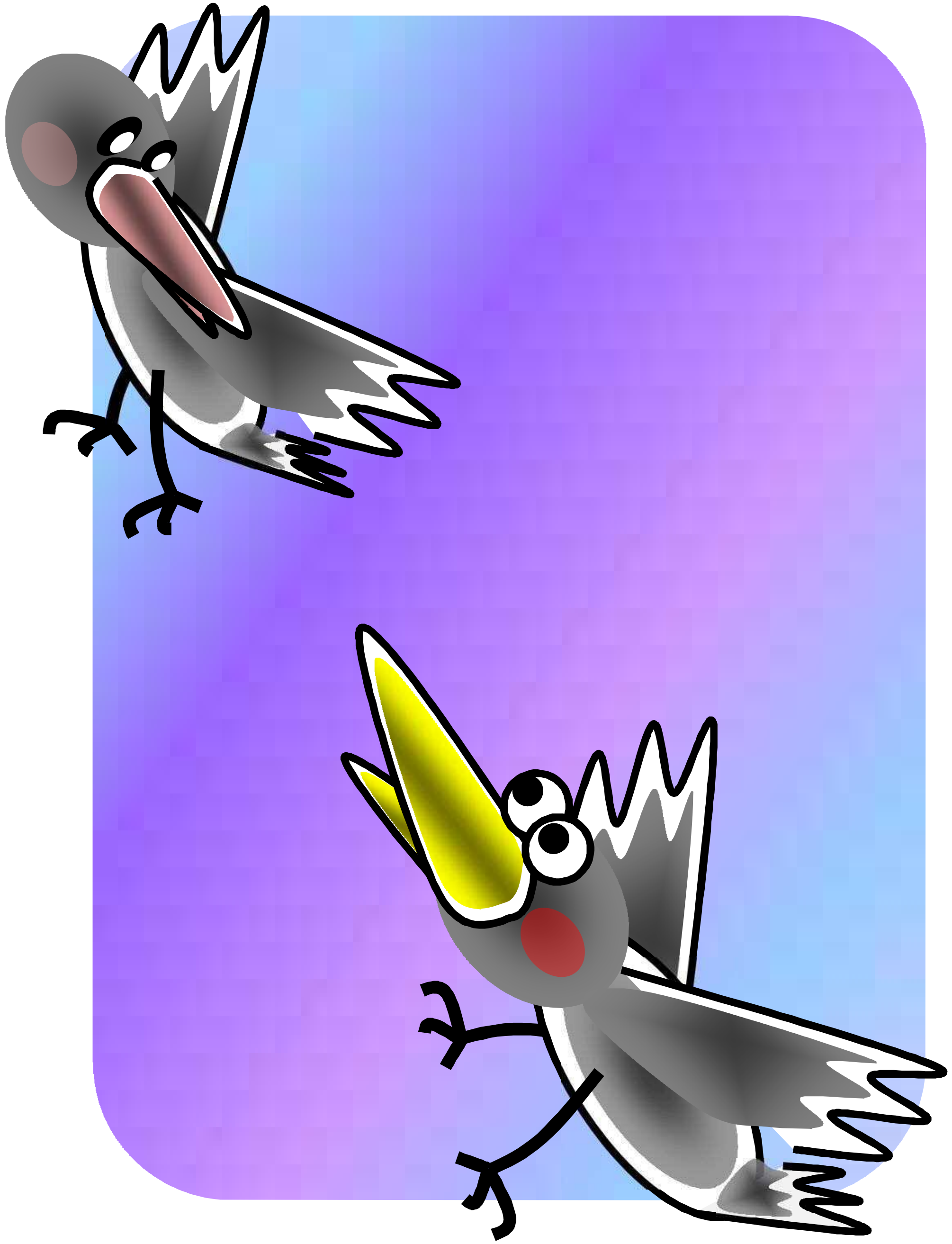
（カーの目の前にいた雌カラスは、カーの視線を感じると、逃げるようにその場から飛び去っていきました。そしてカーも、そんな雌カラスの後を追いかけるように飛び立ちました。）

「あなた、さっきからずっと私のことを見てたでしょ。だから怖くなって逃げ出したのに、なんで追いかけてくるの？そういうの『ストーカー』って言うのよ。この変態」

違うよ、違うって。そんなんじゃないけど。

「何が、違うっていうの。答えて」

おれは、おれはただ、君が急に飛んでいちゃうから、慌てて追いかけてきただけで・・・。



「だから、そういうのを『ストーカー』っていうんじゃない。違うの？」
だって、おれだって分からないよ。何だか、君のことを見てたら、こう、こう胸がバクバクしてきて、それで、それで・・・。そしたら、付いてきちゃった。けれど、分かった。付いてきて後悔していないことを。だって、こうして君と話すことができたから。
「何、言ってるの？自分が何言ってるか、分ってる？すんごい変だよ。おかしいわよ、あなた」
分かる。おかしいの分かるよ。でも、どうしようもないんだ。初めてだから。こんなの初めてだから。自分でもおかしいの分かっているけど、どうしようもなくなっちゃってる。
「じゃあね。もういいでしょ」
ごめんなさい。でも、でも・・・。もう一度、逢いたい。もう一度だけ、逢いたい・・・。ごめんなさい。
「そんなに素直に謝られたら、私が悪いみたいじゃないの。まあいいわ。私は、いつも夕方になると、さっきの所にいるから。じゃあね」
あ、あ、はい。ありがとう。ありがとう。
（パタパタパタ・・・）

第　十二　羽　　告白

（カーにとって、次の日の夕方までの時間は、とても切なく、とても長い長～い時間のように思えました。眠ることもできず、食事ものどを通りません）

あ、来た。本当に来てくれたんだ。嘘じゃなかったんだ。ありがとう。

「こんにちは。なんで、あなたにお礼まで言われなきゃいけないの」

ごめん・・・。

「私、『カラコ』っていうの」

おれ、おれは「カー」、「カー」っていいます。

「そう、カラスだから『カー』、まあいいけど、私も同じようなものだから。私ね、いつも夕方になると、ここに来るの。私のお母さんとお父さんが、出逢った場所なの。お母さんが、私に言ったわ。『カラコ』も年頃になったら、夕焼空で真っ赤に染まった夕暮れ時に、ここで待っていなさい。きっと、お父さんみたいな、素敵な王子様が現れるって。だから私、ここで王子様を待っていたの。そういう事」

おれ、おれ、田舎カラスだけど、全然、王子様にはなれないけど、でも、でもね「嘘」、嘘だけはつかない。本当に嘘だけはつかない。それだけは、自信がある。あ、あ、あの・・・、『好きなんだ、君のことが好きなんだ。もっと、もっと、たくさん、君のことを知りたい。一緒に居たい。

「私も、私も、あなたのことが気になります。昨日逢った時から今まで、また来てくれるか？本当に切なくなりました。それに今、『嘘だけはつかない』って言ってくれたでしょ。それって、とても大切なことだと思うの。そう、本当に大事なこと。だから、私のほうこそ、よろしくお願いします」

ほんと、ほんとに。ありがとう、ありがとう。

「カー、私はあなたに付いていきます。どこまでもあなたに付いていきます。あなたが望む所に付いていきます」

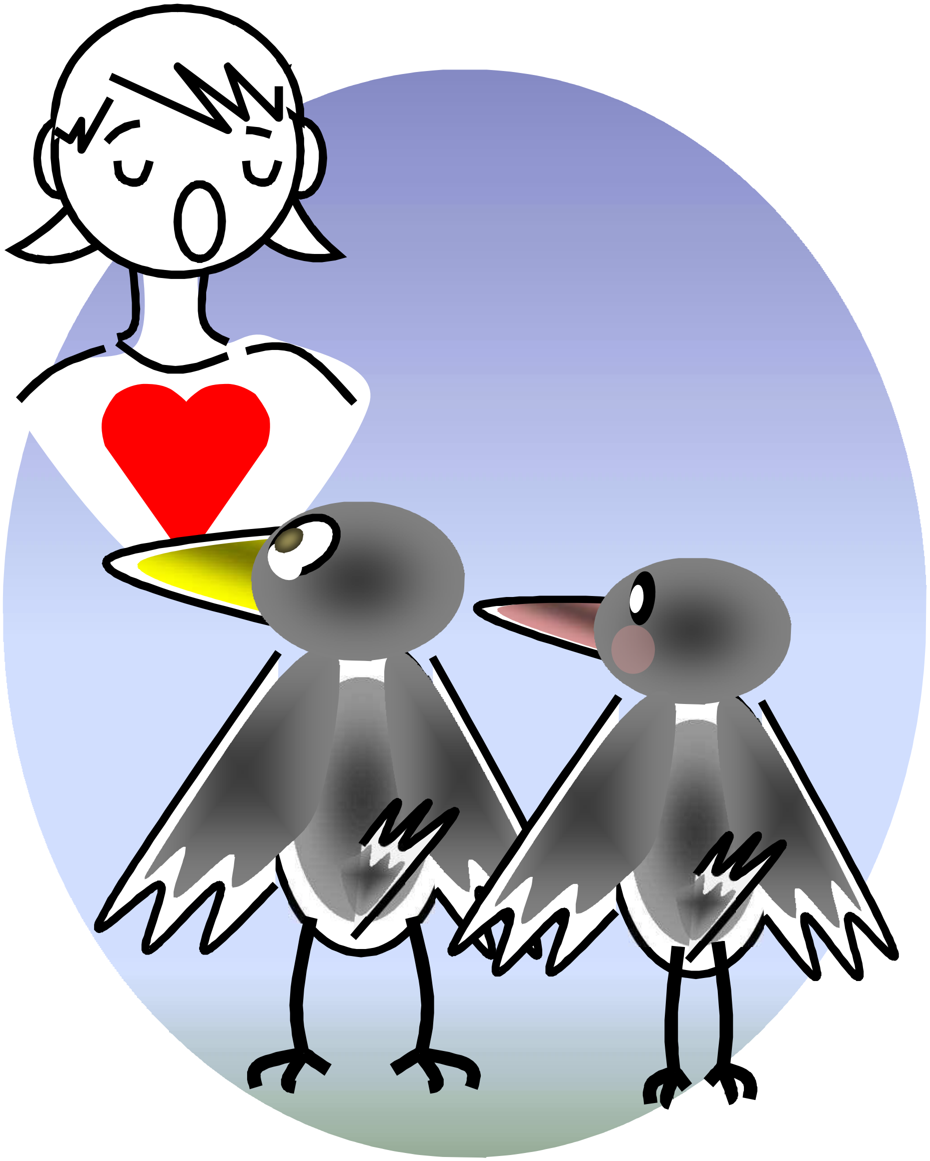
おれ、おれね。もう少し都会ってやつを見て行きたいんだ。人間ってやつを見て行きたいんだ。いいかい？

「はい、お好きなように。私の王子様、ね」

あ、はい。ありがとう、本当にありがとう。

第　十三　羽　夢

カラコ、あの娘、あんな道端で歌を歌っても、お金にならないのに、どうして歌ってるんだろうね？
「そうね、何でだろうね。でもね、カー。お金になるとか、ならないとか、そういうものじゃないと思うわ？あの娘ね、いつも、あそこで歌っているのよ。寒い日も、暑い日も、ああやって歌っているの。自分の歌、歌っているの」
すごいね、本当にすごいよ。本当に好きなんだね
「そうね、すごい好きなんでしょうね。でもね、それだけの理由で出来ることじゃないわ。私、人間のことは、よく分からないけど、あの人、『夢』、夢を追いかけているんじゃない。夢を諦めず、夢に向かって真っ直ぐに進んで行っているんじゃない。自分の可能性を信じて、今、自分に出来ることを、自分なりに考えて、頑張っているんじゃない。でなきゃ、あんなに続けられないわ。一人でも多くの人に覚えてもらおうと、自分の歌を理解してもらおうと、必至なんじゃないのかしら。そんな風に思えるわ」
カラコ、おれ、都会に来てから、人間に失望させられることばかりだったけど、少し見直したよ。人間も捨てたもんじゃゃ、ないって。うん、そう思える。



第　十四　羽　　命あるもの

カラコ、ねえ見て。これ、どうしちゃったんだろ。なんで、こんなことになっちゃってんだろ。

「悲しいね。本当に悲しいわね」

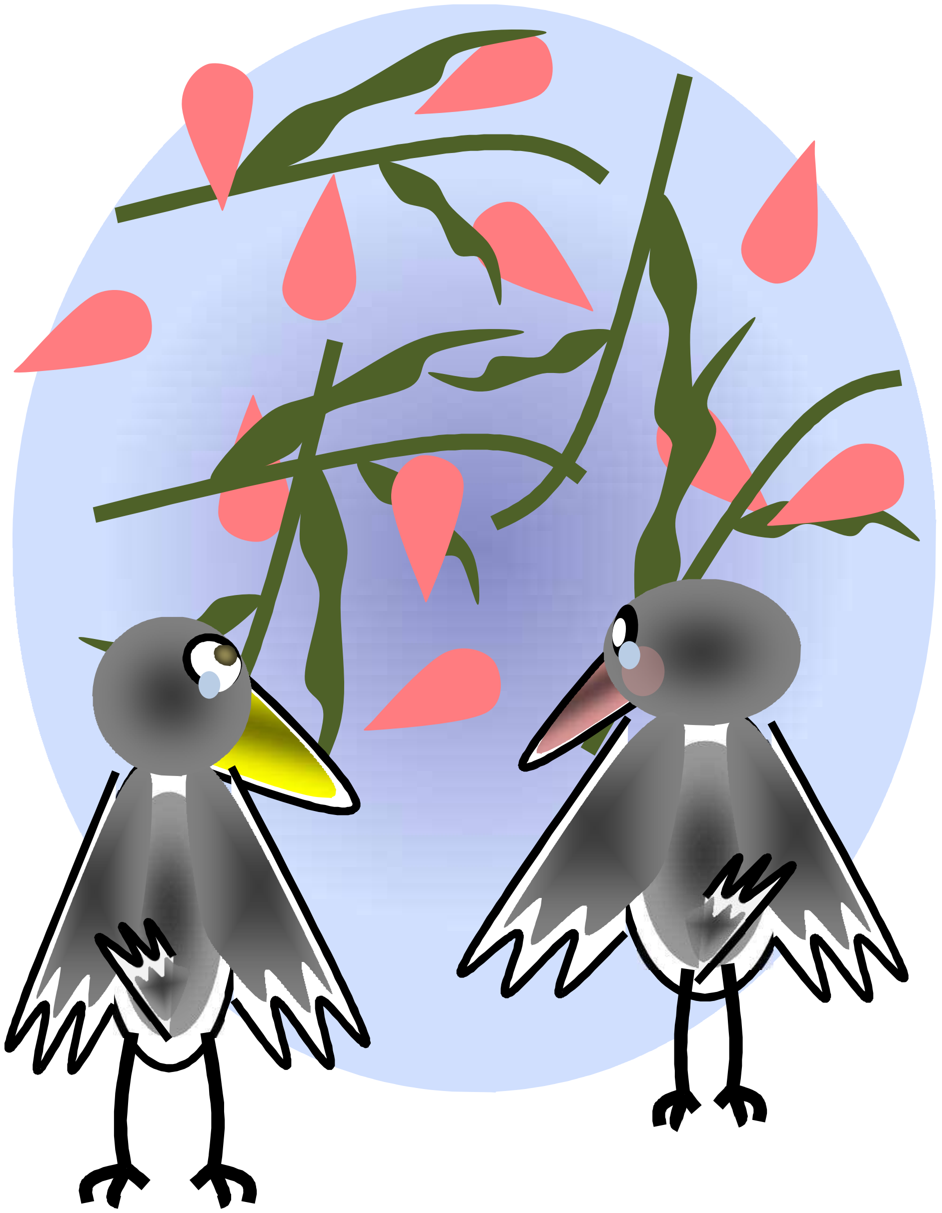
人間だろ、こういうことするの、人間だろ。

「そう、人間ね。悲しいけど、人間ね。でも、これまで一生懸命育てたのも、人間なんだよね」

そうだよね。人間だからっていうの、善くないね。そうだよね、これまで育てたのも人間なんだよね。きっと、この花を育ててきた人は、とっても傷ついているよね。来る日も来る日も、この花の成長を見守って来たんだよね。

「ねえ、カー。私、さっきまでは、すごくこんなことをした人間の事、許せない気持ちで一杯だった。今でも許せない。けどね、けどね、こんなことをした人も悲しいのかも知れない。だって、大切なもの、大切なものを分からないんだもの。それって、悲しいよね・・・」

そうだね、そんなことが分からないなんて、悲しいよね。命、命って、大小なんてないのにね・・・。

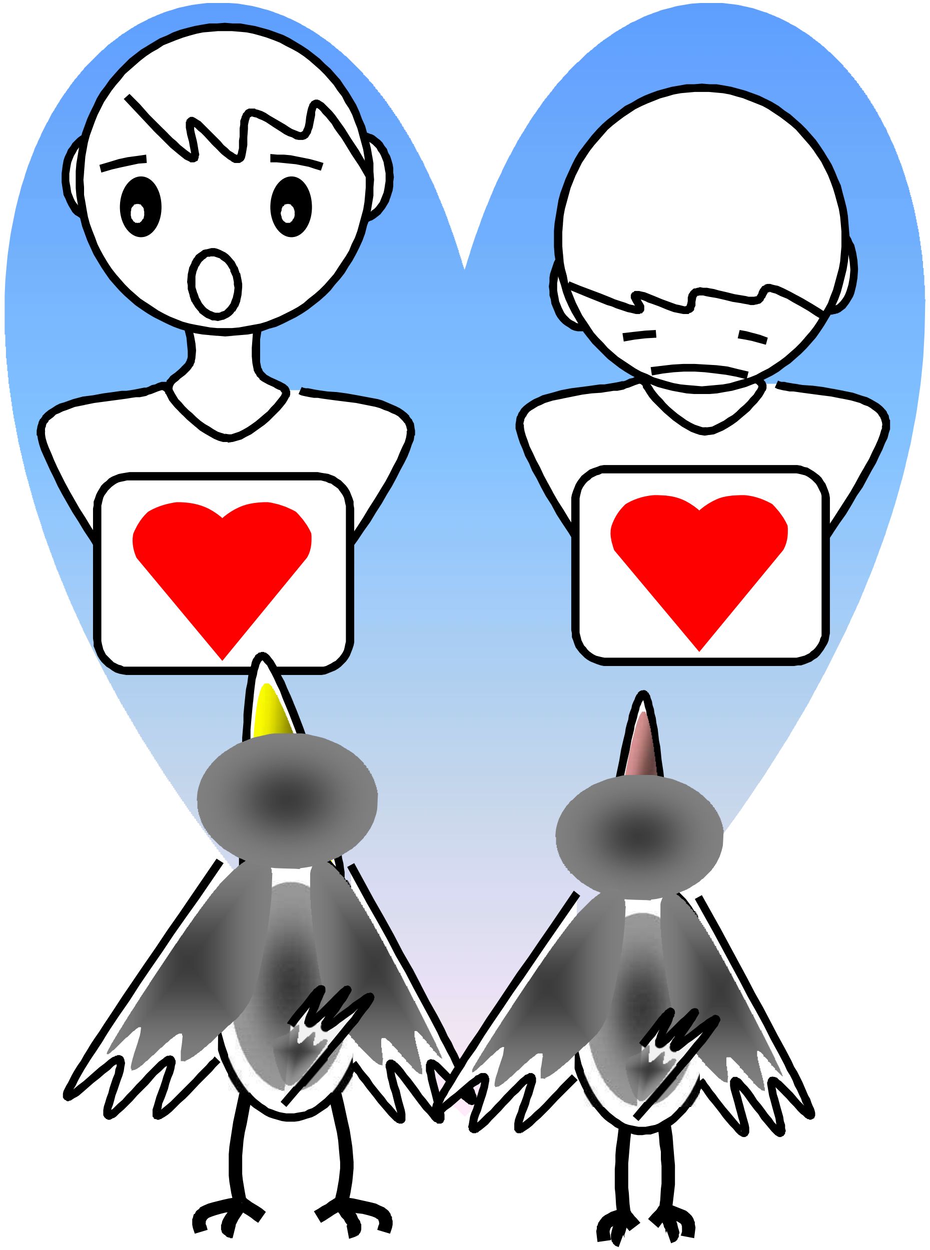


第十五羽　一歩

「カー、こっちに来て」
どうしたの？
「あの子ね、さっきからずっと、ああやって車椅子から立ち上がろうとしているのよ。大丈夫かしら。一人なのよ」
心配だね。でも、ぼくらがそっと見守っていよう。だって、独りで頑張っているんだから。自分の足でもう一度、立とうと頑張っているんだから。
「そうね。そうだよね。あ、でも倒れる。あ、やっぱり転んじゃった。
カー、やっぱり止めないと」
カラコ、あの子の目を見てごらん。あの子、絶対に立ち上がるよ。立ち上がって、絶対に歩けるようになるよ。絶対に。
「そうね、そうだよね。ほら、頑張って、もう少し、もう少しだよ」
やった！立ったよ。
「ほんと、すごいわ。やったね、カー」
おれ、おれもやるよ、絶対。うん、絶対にやる。
「カー、何を？」・・・・。

第　十六　羽　　できることから

カラコ、あの人たち、さっきから通る人みんなに、おじぎをしてお金もらって、何をしているの。そんなに、仕事をするのが嫌いな人たちには見えないけど？
「あの人たちはね、ボランティアっていう活動をしているのよ。自分たちのために、お金を集めているわけじゃないのよ。ほかの人のために、活動をしているの」
ほかの人って、誰のため？家族？友達？
「ん、そうね。みんなのため。顔も知らない困った人のため。わかる？」
分かるようで、わからない。
「そうね、私にも分かるようで、分らない」
そうだよね。だって、お金を持っている人がいて、持っていない人がいる。持っている人が、持っていない人を助ける。それならば、分かる。けれど人間社会は、そうとは思えない。
「でもね、あの人たちのように、少しでも、たとえ少しでも、小さなことからでも、できることから始めるって事も、大切な事だと思うの。たとえ、それが上手くいかなくても。それが、スタートだと思うの」
そうだね。本当にそうだね。



第 十七 羽　素直に

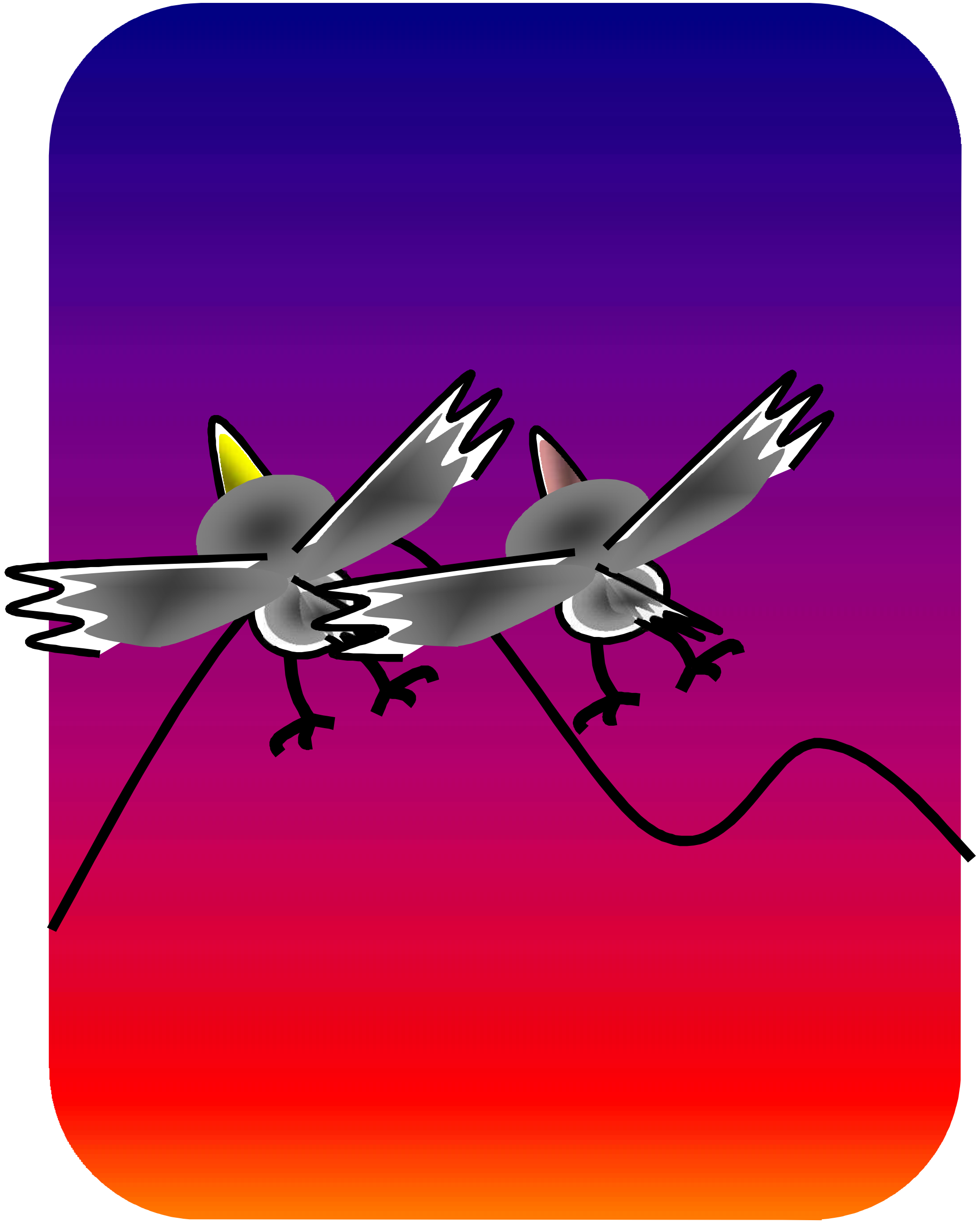
カラコ、おれ、都会に来てから色々な人間を見て、人間が創り上げた社会を見て、そして、それに関わるおれたちカラス、他の生き物たちを見てきた。そしてカラコにも出逢えた。

それでさ、感じたんだ。分ったんだ。一番大事なもの、何が大事なものなのか分かった気がする。

「そう」

人間ってさ、不器用なんだよね。見てきてさ、とても不器用なんだよね。素直じゃないんだよね。変なプライドとか、変な意地があったり、本当に素直じゃないんだよね。つまらないよね、もったいないよね、すごい損だよね、そういうのって。

「そうね、私もそう思うわ。けどね、私も人間のことを、どうこう言えない。だって私も、カーに出逢う前は、そうだったから。カーに出逢って、なんだかとっても素直になれた。自然に素直になれた。だから、人間も変われると思うの。そんなに本当に悪い人って、居ないと思う。みんな、素直じゃないだけ。そう、そんな気がする」

第十八羽　旅立ち

カラコ、行こうか。
「はい」
カラコ、ありがとう。おれ、カラコのことずっとずっと、大事に思うから。
ずっとずっと、大事に思うから。でもね、絶対に幸せにするとは約束できない。
だってカラコが、おれのこと、やんなちゃうかもしれないから。
「ううん、そんな事ないわ。私の方こそ、カーのことずっと大事に思える。
うん、ずっとずっと。私も大事なもの、本当に大事なもの、気付いたから。
カー、ありがとう」
カラコ、みんなに言いたいね。みんなに伝えたいね。『ありがとう』って。
「そうね、みんなの胸のずっとずっと奥にまで届けたいね『ありがとう』って」
ぼくたち、ぼくたちだけで生きてこられたわけでもないし、生きていけるわけ
でもない。みんなが、この地球上に存在する全ての生き物、環境があったから
こそ、生きてこられたし、これからも生きていける。全てのものに感謝の
気持ちを伝えたい。一言、『ありがとう』って。
（二羽のカラスは、仲よく旅立って行きました。）カー、カー、カーン　（完）